

2019年度春号 研究室だより

2018年度の西洋史学研究室の近況をご報告させていただきます。

2018年度の教員スタッフに関しましては、岡崎敦教授（フランス中世史・アーカイブズ学・資料学）、今井宏昌講師（ドイツ現代史）に加え、あらたに助教として大浜聖香子先生（中世フランス政治社会史）をお迎えしました。大浜先生は、2018度に提出された博士論文により人文科学府長賞を受賞されておりましたが、着任後は、九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞の若手女性研究者部門最優秀賞を受賞されました。博士論文も、2019年3月に、『12-13世紀におけるポンティウ伯の中規模領邦統治』と題して、九州大学出版会より刊行されました。

岡崎先生は、科学研究費助成の共同研究「資料と公共性」を本格化され、9月に旗揚げの研究会が開催されたほか、12月にはオープンデータに関するシンポジウムの企画運営にも携われました。今井先生も、年来のテーマであるドイツの義勇軍についての科学研究のほか、第一世界大戦期の久留米ドイツ人俘虜収容所に関するプロジェクトに参加されるなど、七面六臂の活躍を展開なさっております。

また非常勤講師として、学内より野々村淑子先生（イギリス教育史）、学外では熊本大学より中川順子先生（イギリス近世史）、福岡大学より森丈夫先生（アメリカ史）をお招きし、様々なテーマの演習が開講されました。学部に関しては、4月に、2年ぶりに定員いっぱい10名の進学生を迎えることができました。さらに修士課程には村本克史君（ドイツ近世史）が新たに加わり、昨年よりも大所帯となって賑やかさを増した研究室となっています。

2018年度のもっとも大きな事件として、文学部のキャンパス移転が挙げられます。これに先立ち、研究室主催の「さよなら箱崎」イベントが開催されました。6月30日に実施した研究室開放イベントでは、多くのOB・OGの方々が足を運ばれ、当時の思い出やこぼれ話を楽しげにお話しされるなど、それぞれの学生時代を懐かしまれました。翌日の7月1日には、不定期に開催している「西洋史学情報交換会」において、学部4年生の坂本隼人君と平田哲也君の両名が、昨年度の研究室だよりでご紹介した、西洋史学研究室の記憶保存プロジェクト、つまり研究室に残された卒業・修了論文や写真・アルバム、研究室日誌などの資料の整理事業について、中間報告を行いました。

8月末から9月にかけて行われた研究室の移転については、前年より少しずつ研究室内の整理は進められていましたが、実際の移転日が近づくにつれその作業も本格化しました。研究室備品等をそのまま新研究室へと運ぶことは難しく、今まで研究室でその歩みをともしてきた様々なものとの別れを決断しなければなりません。年季が入っていた据え置きのコピー機もこの機会にようやく新しく買い換えられ、今後の活動をより円滑に行うことができる環境づくりを目指して努力を重ねております。

本研究室主体の学会・研究会関係では、4月に、2018年度九州西洋史学会春季大会が、「中世後期ロンドンの「外国人」」をテーマに行われました。九大箱崎キャンパスでの最後の学会大会ということもあり、大いに盛り上がりました。10月には、福岡大学での九州西洋史学会秋季大会にて、「近代日独関係における外交と文化」と題するシンポジウムが開かれ、今井先生が「ドイツ兵伴虜をめぐる文化交流」という報告をなされました。11月の九州西洋史学会若手部会では、坂本君が卒業論文に向けた報告を行いました。また、伊都キャンパス移転後初の学会となった12月の九州史学会西洋史部会では、岡崎先生が「フランス革命とアーカイブズ」という題目で報告されました。

このように今年度も教員・学生ともに精力的に研究活動に励んでおります。これらの活発な研究活動へ多くの学生が参加することで、本研究室を中心に九州全体の西洋史学界がますます発展していくことを期待します。

以上、簡単ながら今年度の西洋史学研究室の近況をご報告致しました。末筆ながら、卒業生・修了生の皆様のご健勝、ならびに益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

訃報

本研究室の卒業生で、教養部ならびに文学部教授を務められた、九州大学名誉教授、馬場典明先生が、2018年2月5日に逝去されました。深くご冥福をお祈りいたします。

新刊紹介